

西国第十番 明星山

御本尊／千手観世音菩薩 開基／行表和尚

本山修験宗 三室戸寺

「花」によせて

あでやかな大輪の花を咲かせる百花の王、ボタンは一名「洛陽花」。

国際的な大帝国として隆盛を誇った中国唐王朝の古都の名を冠せられ、古くから人々を魅了してきた名花であります。

丁度、西国三十三所の草創期とほど遠からぬ頃、唐の都の長安や洛陽には巨大な都城が整備され、「開元の治」で

名高い玄宗皇帝が辣腕を振るい、まさに世界の中心として、咲き誇るボタンの花のごとき絶頂の時を迎えておりました。折しも宮廷では盛んにボタンの花見が催され、人々は挙って美しい花を求め、熱狂したと伝わります。やがて、李白がその美しさをボタンに擬えた楊貴妃が登場すると、さしもの唐王朝の隆盛も衰亡の兆しを孕むものとなってゆ

きます。後に玄宗皇帝と楊貴妃の悲哀の物語を「長恨歌」として謳いあげた白居易は、かつて人々がボタンに熱狂した様を、「狂うが如し」と評しているところを見ると、花下に我が世の春を謳歌する人々に対する、聊か冷ややかな視線が彼の眼差しには感じられます。

鳥窠道林和尚と交わした七仏通戒偈にまつわる問答で一喝された白居易ではありませんが、禪者として、仏教にも造詣の深かった彼にしてみれば、人々が花に浮かれ、熱狂する様は、定めなき現世の虚妄なる空騒ぎと映ったのかもしれない。とは言え、「長恨歌」の中では、嘗て二人は長生殿において、「天に在りては、願わくは比翼の鳥となり、地に在りては、願わくは連理の枝とならん」との言葉

ともすれば、仕事に忙殺される現代人にとって、美しい花を見て素直に「美しい！」と愛でる心を保つことは、そう容易ではないかも知れませんが。しかし、四時の移ろいとともに、今を盛りに咲き誇る花のみならず散りゆく花の姿までも、ありのまま、そのままに眺めることの出来る、動ぜざる心を養ってゆきたいものです。

